元祖室の概要

元祖室は、八合目（旧七合五勺）にある山小屋である。烏帽子岩に隣接して建つ。

昭和 60 年（1985）に、元祖室付近の登拝道整備に伴う石垣工事に際し、文明 14（1482）年の銘をもつ不動明王像御正体（山梨県指定文化財・ふじさんミュージアム総合展示室で展示）が発見されている（※1）。そのため、室町時代には当地にこの御正体を安置する堂宇があったと見られる。また富士山で修行する人々の拠点になっていたと考えられるため、修行者が堂宇内に籠ることができるようになっていたか、宿泊するための小屋が併設されていた可能性がある。

その後、江戸時代中期の 18 世紀になると、富士講の隆盛により登山者が急増したため、富士山の山小屋では、小屋の宿泊機能を高めるためにその増改築を進めたとみられ、修行地としての小屋から宿泊地としての山小屋へと機能転換を図っていった。元祖室についても、この時期に今に続く山小屋としての基礎が確立したが、その大きなきっかけとなったのが富士講の中興の祖とされる食行身禄の入定であった。

食行身禄は享保 18（1733）年に烏帽子岩の前に小さな厨子を造り、そこで 31 日間の断食修行をし、山中で亡くなった富士行者である。この時に 31 日間にわたって身禄に付き添い、その教えを授けられたのが上吉田の百姓、田辺十郎右衛門であった。身禄の死後、田辺十郎右衛門は上吉田の御師となり、身禄の教えを広めていくが、その結果、烏帽子岩は富士講の聖地となる。そして身禄を祀る烏帽子岩神社が建立されるが、今に続く元祖室が創業したのもほぼ同時期だったと考えられる。